

上野殿御書

建治元年八月一八日 五四歳

態^{わざ}と御使^{それ}ひ有^やり難^{かたづ}く候。夫^めについては屋形造^でりの由目出^た度^たくこそ候へ。何か参^{いつ}り候ひて移徙^{わたまし}申し候はゞや。

一、棟札^{むなふだ}の事承^ほり候。書^まき候ひて此の伯耆公^きに進^{まい}らせ候。此の経文^すは須達^{だつ}長者^ぎ祇園^{おん}精舍^{しやう}を造^じりき。然^いるに何^いなる因縁^{いんねん}にやよりけん、須達^す長者^{だつ}七度^{しち}まで火災^かにあひ候時^じ、長者^{ちやう}此の由^ゆを仏^{ぶつ}に問^{もん}ひ奉^{ほう}る。仏^{ぶつ}答^たへて曰^いはく、汝^にが眷属^{けんぞく}貪欲^{こんよく}深^ふき故^ゆに此の火災^かの難^{なん}起^おこるなり。長者^{ちやう}申^まさく、さてい^いかんして此の火災^かの難^{なん}を^ふせ^せぎ申^ますべきや。仏^{ぶつ}の給^{たま}はく、辰巳^{たつみ}の方^{かた}より瑞相^{ずいさう}あるべし。汝^に精進^{しやうじん}して彼^かの方^{かた}に向^むかへ。彼^か方^{かた}より光^{ひかり}さゝば鬼神^{きしん}三人^{さん}来^きたりて云^いはん。南海^{なんかい}に鳥^{とり}あり、鳴忿^{めいふん}と名^なづく。此^この鳥^{とり}の住^す処^{ところ}に火災^かなし。又^{また}此^この鳥^{とり}一^{ひと}つ^つの文^{ぶん}を唱^{とな}ふべし。其^{その}の文^{ぶん}に云^いはく「聖主^{しょうじゆ}天^{てん}中^{ちゆう}天^{てん}、迦陵^{かりやう}頻伽^{びんか}声^{しやう}、哀愍^{あいみん}衆生^{しゆじやう}者^{しや}、我^が等^{とう}今^{こん}敬^{きやう}礼^{らい}」云云。此^この文^{ぶん}を唱^{とな}へんには、必^{かなら}ず三十万里^{さんじゆばんり}が内^{うち}には火災^かをこらじと、此^この三人^{さん}の鬼神^{きしん}かくの如^{ごと}く告^こぐべきなり云云。須達^{すだつ}、仏^{ぶつ}の仰^{おほ}せの如^{ごと}くせしかば少しもちがはず候^まひき。其^{その}の後^{のち}火災^かなきと見^みえて候。これに依^よりて滅^{めつ}後^ご末^{まつ}代^{だい}にいたるまで、此^この経文^{きやうぶん}を書^かきて火災^かをやめ候。今^{いま}以^もてかくの如^{ごと}くなるべく候。返^{かへ}す返^{かへ}す信^{しん}じ給^{たま}ふべき経文^{きやうぶん}なり。是^{こゝ}は法華^{ほふくわ}経^{きやう}の第三^{だいさん}の卷^{くわん}化^け城^{じやう}喩^ゆ品^{ひん}に説^{せつ}かれて候。委^{こま}しくは此^この御房^{ごぼう}に申^まし含^くめて候。恐^{おそ}々^そ謹^{きん}言^{げん}。

八月十八日

日 蓮 花 押

上野殿御返事